

4. 底びき網や刺網で漁獲される魚介類

ニギス *Glossanodon semifasciatus*



ニギスは高知県で「沖うるめ」という名で流通しています。これは写真のようにウルメイワシに似て目が大きく、ウルメイワシが水深 100m より浅い海域で漁獲されるのに対して、ニギスは水深 150m 以深と、より沖合に生息しているためと考えられます。

高知県沖で漁獲されるニギス類には「カゴシマニギス」と呼ばれる近縁の別種も含まれます。カゴシマニギスの分布量はニギスの約 100 分の 1 と見積もられていて、写真右（上、カゴシマニギス、下、ニギス）のように吻の形が明らかに違うことで区別できます。

生物特性

ニギスの生態については独立行政法人水産総合研究センター中央水産研究所高知庁舎で調査が行われてきました。その結果によると、土佐湾のニギスは水深 100～450m の海域に分布し、春と秋に生まれる群があります。春生まれ群は 4～6 月に被鱗体長（以下、体長）2.0cm 以下の稚魚として水深 100～150m に出現します。その後、8～9 月を過ぎると成長しながら水深 150～250m の海域へ移動し、成魚群に加入します。秋生まれ群は 11～12 月に発生します。

ニギスは海域によって成長や年齢が異なります。土佐湾では 1 歳が 13.0～15.0cm、2 歳が 17.0～19.0cm で、寿命は 3 歳までと考えられています。一方、日本海側（新潟県）では 1 歳が 5.1～11.0cm、2 歳が 14.5～16.6cm で、5 歳の個体まで出現することから、土佐湾のニギスは成長が速く、寿命が短いと考えられています。これは、日本海のニギスが生息する場所の方が低い水温であるためと考えられています。

土佐湾のニギスは 2 歳から成熟し、水深 200～300m で産卵します。成魚の生殖腺は春生まれ群の起源となる 2～3 月と秋生まれ群の起源となる 11～12 月に発達します

が、2～3月の方がよく発達します。このため、稚魚の発生量も春生まれ群の方が多くなりますが、成魚では秋生まれ群が高率に含まれます。この理由についてはよくわかっていません。

資源動向

高知県で漁獲されるニギスは北限を宮城県金華山沖、南限を宮崎県日向灘沖とするニギス太平洋系群に含まれています。

ニギスは漁獲量の変動が大きな魚で、昭和45年（1970年）以降、約200トン前後で推移していましたが、昭和56年（1981年）以降、増加傾向となり、平成8年（1996年）には766トン漁獲されました（図1）。翌年の平成9年（1997年）以降、減少傾向に転じましたが、最近では250トン前後まで増加しています。

平成22年（2010年）の資源評価では、ニギス太平洋系群の資源水準は「中位」、動向は「横ばい」と判断されています。

県内の漁獲動向

高知県内のニギスは中央部（御豊瀬・浦戸）に基地がある沖合底びき網漁業で漁獲されます。沖合底びき網漁業にとってニギスは最も大切な魚で、その漁獲量は全体の20～60%（20年間の平均は49%）を占めます。

高知県で漁獲されるニギスの体長は15～20cmが主で、2歳魚を主に漁獲しています。5～9月は休漁期となっていて（図2）、10月～翌年の4月にかけて漁業が行われます。漁獲効率（1曳網あたりの漁獲量、CPUE）は漁期が始まった10月に最も高く、その後、減少します。これは、漁場の資源量を反映していると考えられます。

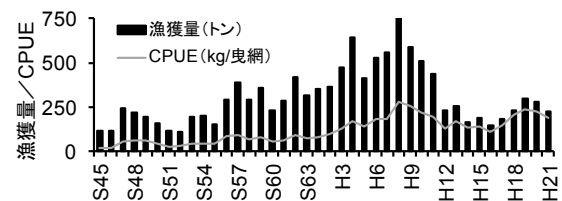


図1 高知県産ニギスの漁獲量とCPUEの推移（昭和45～平成21年）。

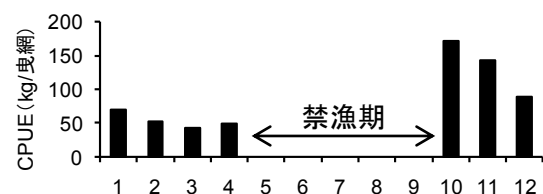


図2 沖合底びき網漁業によるニギス漁獲の月別平均CPUE（昭和45～平成21年）。